

「アーキビストって早起き？」
ーアメリカにおけるアーカイブズ活動ーⁱ

デイヴィッド・B・グレイシー 2 世
(テキサス大学オースティン校情報学大学院アーカイブズ学教授)

(日本語で) 皆さん、こんにちは! そしてテキサス流に、Howdy!

謝辞

高埜先生、同僚である安藤先生、そしてアーカイブズの友である皆さん。アーキビスト養成のための大学院課程が初めて開設されたこの年に、皆さんにお話する特別な機会を与えていただいたことに、まずは心からお礼を申し上げたいと思います。皆さんがこの専攻を開設されたことを、世界中のアーキビストが拍手をもって迎え、祝福しています。またアーカイブズ事業を支える人材の教育が世界中で進み、精緻化され続けている中、アーキビスト教育プログラムを強化するため私たちが参照すべき知識の蓄積に、ここ日本での経験が加わることは計り知れない意味を持ちます。だからこそ、アーカイブズ事業とそれに携わる人材の教育に関するアメリカの経験について、私が最初にアーカイブズに職を得てから 49 年間に蓄えてきた知見を皆さんと分かち合う機会を与えてくださったことに感謝いたします。また、まさに端緒についたばかりの教育プログラムをつくりあげていくそのさまを目の当たりにし、そんな皆さんの経験から学ぶ機会を与えて下さったことにも、お礼を申し上げたいと思います。

はじめに

ある日の午後のこと。アーキビストである私の同僚が、最近お隣同士になった人と話をしていたとき、その隣人が同僚に「お仕事は何を？」と尋ねたのだそうです。同僚はいつもの快活な調子で「アーキビストですよ」と答えました。じつは私たちアメリカのアーキビストは、「アーキビスト」と話しているのだ、とそのとき初めて悟った人の反応を見るクセがついています。アーカイブズの何たるかを知っている人の場合、にっこり笑い、誇らしげにアーカイブズでの自分の経験を話してくれるのがふつうです。一方アーカイブズが何であるか、アーキビストが何をやる人かほとんど知らない人の場合、眼を細め、口をすぼめ、さらにほんの少し体をひくのがふつうです。長い、あるいは専門的な返事がくるのを恐れてのことなのですが。

さて、私の同僚が話をしていた隣人は、この 2 つの反応のちょうど中間にくるような人でした。アーキビストがどんな仕事をしている人か、そして私たちアーキビストがどれほどその仕事から励ましを得ているかは何となくわかる。でも実際どんな仕事で、どんな意味を持つかははっきり知らない。そんな人だったこの隣

ⁱ 訳注：本稿は、2008 年 10 月 20 日、学習院大学で行われた講演のため準備された原稿に、グレイシー教授が後日訂正・加筆したものの全訳である。またタイトルの「アーカイブズ活動」は原文では archival enterprise で、本文中では「アーカイブズ事業」と訳しているが、タイトルに関しては講演時のままとした。

人は、慎重に、でも気持ちを込めてこう言ったのだそうです。「そんな仕事をするには、ずいぶん早起きしなければならないんでしょうねえ！」

アーカイブズの本質と重要性

この隣人は、アーキビストが果たす仕事について、そして彼自身がいま生きているように生き、生きたいと思うように生きるために、私たちの仕事がいかに欠かすことのできないものかについてはほとんど知らなかったにしても、実にいいところを突いていました。私たちは確かに、アーカイブズの仕事を楽しんでいます。なぜなら、アーキビストがする仕事は、現代社会が存続するための礎だからです。私は私たちの仕事を「アーカイブズ事業」と呼んでいます。アーカイブズ事業とは、アーカイブズに関するサービスを社会に対しダイナミックに提供することです。そしてアーカイブズに関するサービスとは、社会の記憶の基礎をなす記録情報の汲めど尽きせぬ源泉の利用を維持し、拡大し、確保し、促進することを意味します。また記録情報とは、ある業務の遂行のため、そしてその業務の証拠を残すために生み出され、記録という形で—文書に—とらえられた情報、を単純に意味しています。それはまさに無尽蔵です。なぜならそれぞれの世代が、それぞれの問題や心配ごとに直面した際に、それをその世代なりのやり方でそれを解決すべく、この記録情報の源泉を利用するからです。この記憶は歴史的発展の知識である、とする人々もいます。しかしより多くの人々にとって、この記憶は、ある業務の遂行にあたり、十分に情報を得た上で決断を下すための歴史的文脈を提供するものになってきています。そしてより深いレベルではこの記憶こそが、世代から世代への社会における連続性を支えているとも言えるでしょう。先祖について、そして先祖が生きた時代について調査している家族史・家系研究家たちⁱⁱ—アメリカのアーカイブズ機関の利用者で最も数の多い集団をなしている人たち—がその証拠です。現代社会は、アーカイブズとそのサービスなしには機能し得ないのです。

現代社会のさまざまな業務上のやりとりは、情報の有効性が確かなものであることを必要とします。この有効性の根源は文書と、その遂行において文書が生まれるに至った業務とが、継続的に、何ら手を加えられることなく関連性を保ってきたという事実にあります。非常に単純な事柄を除き、私たちはある事柄が真実であるかどうかに関して、誰か一人の記憶に頼ることには不安を感じますし、またそうあるべきなのです。

業務の遂行にあたって作成される記録は、現代の民主的社会の基礎となる2つの要素が現実となるよう、そうした業務の証拠を残すものです。第1の要素は、個人や団体に認められる権利が、事実とその根拠を有するということです。長年の実態や実績に基づく権利や受給権で、適格性の証明を必要とするようなものなどが特にそうだと言えるでしょう。第2の要素は、個人も政府も、自らの行為について説明責任を果たすことを求められる可能性があるということです。それを果たすために何年も、何十年もかかるとしてもです。

結局のところ現代社会は、私たち個人もそうですが、社会と私たちの歴史の産物です。そして歴史の流れを見極めることは、意図的にそれを無視することも含め、未来に向かう道筋を定めるための基礎となるも

ⁱⁱ 訳注：原文はgenealogists、ジニオロジスト。大多数は自らのルーツや家族の歴史を趣味で調べるアマチュアだが、！同様の調査を職業として請け負う人もいるとのことで、仮にこの訳語を使用してみた。

のです。アーカイブズは確固たる歴史を形づくるための基盤を形成するのです。確かに歴史家たちはある事象についてそれぞれ異なる理解や意味づけをし、歴史に異なる光を当てます。しかしどんな歴史も、アーカイブズという基盤に立ち返ることを忘れては信頼に足るものとは言えないのです。

これらのことが全て真実だとすればつまり記録が現代社会の存続にとって基本的なものであること、記録が社会に対しその役割を果たすためには、文書とそれを生み出した行為との関係の真正性を維持することが欠かせないこと、そしてアーカイブズが歴史の基盤であり、私たちの社会状況に影響を与える決断にはその理解が不可欠であること、ですがこれら全てが真実だとすれば、アーカイブズに関わるアーキビストの使命と目的は次のようになります。

1. その遂行のため記録が作成された業務との関連で有効な情報の存在と利用可能性を維持し、確実にすること。
2. 歴史的な出来事に関する私たちの理解の基盤となるべきものを、確実に利用できるようにすること。

私の同僚のアーキビストも、そして私も、また新たな1日をアーカイブズに捧げるべくベッドから飛び出し、はすむ足取りで仕事に向かいます。隣人たちが生きたいように生きる、その力を彼らに与えるためアーカイブズが社会に果たしている「基盤」としての役割について当の隣人たちがほとんど知らず、評価してくれなくても、私たちはアーカイブズに関するサービスが社会全体を、そして彼ら1人1人—あなた方1人1人—を支えているのを確かめることによって、自分たちの仕事から元気をもらうのです。

多少の違いこそあれ、とくに西欧社会では、アーキビストはつねに社会の基盤を維持するという責任を担ってきました。

2,500年ほど前に英単語「archives」の語源となる言葉を生み出したギリシア人たちは、記録を収蔵する施設—アーカイブズ—を、コミュニティの2つの要求を満たすものと捉えていました。第一に、アーカイブズはコミュニティの活動の記録を保存するものでした。例えば政府の役人の仕事の報告書や、スポーツ競技の記録などです。第二に、それは個人と個人がある種の間関係を確立し、それを公にしようとする場合—例えば結婚などですが—に作成される文書の保管場所を提供するものでした。公示することによって、コミュニティの構成員全員に、文書化された関係に関してはそれに応じた適切な行動をとることを求めるという目的が果たされたのです。

ローマ人たちは、ギリシアの概念を取り入れたうえで、ある制度をひとつ追加しました。公的な登録制度です。帝国政府は、どんな民間組織が存在し、それらが何をしているかを把握するため、そうした民間組織の存在に関する文書を提出することを求めています。民間組織の側も、こうした仕組みが彼らの存在を公式に認可するものであると評価していたのです。

それから1,000年以上たった18世紀の終わり頃に、フランス革命の指導者たちがアーカイブズの本質と意味を大きく変え、「アーカイブズ機関が社会に対して果たす役割」を語る時現代の私たちが意味する内

容の基礎を築いたのです。革命家たちは、アーカイブズ機関が所蔵する記録は人々の閲覧に供されるべきであり、政府の利用に限定されるべきではないという原則を初めて打ち立てたのです。それに加えて、彼らは記録を管理し、国家の歴史意識と愛国主義の中心点とするために最初の「国立公文書館」を創立したのです。こうしたことに取り組む中でフランス人たちは、記録の根本的な真実を発見しました。その内容の有効性に疑問を持つ余地のないほど完全な形で保たれた文書は、力を持つということです。その一つは、権利を与える力です（例えば、農民に土地を与える）。もう一つは、免責する力です（意思に反して通常では絶対にしなかったような行為を強制された人に関して、その人が、当該行為について知られていることだけから推測されるような人物ではないのだということ、公的権威により明らかにすること）。記録の有するこうした価値は、東ドイツ政府解体後、旧東ドイツ秘密警察の記録にドイツ人たちが向き合ったときの苦闘に最もよく現れていたと思います。

さて、アーカイブズの意味と目的についてのフランス人たちの貢献はこれだけにとどまりませんでした。彼らはまた、「歴史的アーカイブズ」と「同時代のアーカイブズ」という今も用いられる区別を導入したのです。革命の結果、フランス人たちはそれまで知られてこなかったような性質の記録を手にするようになりました。それは、記録作成のもととなる活動をしていた政府、つまり君主がもはや存在しなくなったため、記録作成機関の業務遂行には使えない記録だったのです。確かに、長年を経た記録は以前もアーカイブズと呼ばれていたのですが、崩壊した君主制の記録はまさに「歴史的アーカイブズ」でした。というのも、そうした記録の主たる利用目的は、歴史を研究し、歴史を書くことにあったからです。

アメリカの経験

「いつ、どんな状況でアメリカのアーカイブズ事業は始まったのか?」。これは答えがいろいろあるおもしろい質問です。アーカイブズ事業の本質をどう考えるかによって、答えは違ってきます。

アメリカのアーカイブズ事業は記録とともに始まった、と言えるかもしれません。つまり、政府の活動により作成された記録が、初めて保管されたときです。これは、ローマのモデルに従ってアーカイブズをとらえたものと言えるでしょう。文書となっていたのは多くの場合植民地諸機関に資金提供し監視しているヨーロッパの企業や国家の記録でした。そうしたファイルの中には、「記録がない」と植民地総督たちが不満を述べている書簡が多数見出されます。前任の植民地担当官が、任期終了と共に持ち帰ってしまったのです。確かに政府の役人は、その在職中に責任を持つ記録の管理についても相当にずさんだったようで、19世紀初めにアメリカを旅したあるフランス人がこんな意見を述べているほどです。アメリカ人は政府の記録にほとんど注意を払わないので、二、三十年もたてばアメリカの歴史を書くよりも中世ヨーロッパの歴史を書く方が簡単になるだろう、と。植民地時代のアメリカにおけるアーカイブズ事業は主として、体系的にアーカイブズを保存することに関する個人的な作為または不作為の物語なのです。

アメリカのアーカイブズ事業は、アーカイブズを保管し守るために特別に設計された建物が建てられたときに始まった、と言う人もいるかもしれません。その種の建物の最初は、ヴァージニア州ウィリアムズバー

グの公文書館です。これは1748年に設立されたもので、議事堂の建物が火事になり大量の記録がほとんど焼けてしまったことがきっかけでした。記録が失われる危険性を小さくするため、政府は公文書館の建物を建てただけでなく、そこに収められる全ての記録が「しっかりした木の箱」に保管されるよう定めました。建物の火事の際には誰かがその箱をさっとつかんで外に放り出すことができるので、記録に深刻な損害を与えずにすむというわけです。幸いなことにその後火事はありませんでした。アメリカのアーカイブズ事業が公文書館の建物が建ったことで始まったと考える人たちは、アーカイブズの仕事の核心は単なる「保管」だと（いかにも安全な保管ですが）、とにかく「ただ保管、それ以上の何ものでもない」と考えていると言えます。

アメリカのアーカイブズ事業は、個人のアーカイブズを収集しようという最初の機関が設立されたときに始まった、と言うこともできるでしょう。1791年、アメリカ独立革命の最後の戦いが終わってからわずか10年、まだフランス革命が進行中に、何人かのアメリカ人が集まってマサチューセッツ歴史協会（Massachusetts Historical Society）を設立しました。その目的は明確で、国家の最も偉大な歴史的事件、つまりアメリカ合衆国建国をもたらしたアメリカ独立革命に際し重要な役割を果たした個人のアーカイブズを収集することでした。そしてその動機は、ある歴史的時期の文書を残すこと―歴史を書くために、アーカイブズを収集すること―だったのです。彼らが設立したのは、それまでに類を見ないものでした。彼らは、組織外の個人（この場合、マサチューセッツ歴史協会会員ではない人ということです）のアーカイブズを収集するための、運営組織と収蔵施設の双方を創設しました。個人として歴史的役割を果たした人で、その業績は単に銅像にして記憶されるだけでなく、その業績を成し遂げるにあたり彼らが作成した文書を、その後の研究のために集めることによってこそ真に記憶されるべき人たちのアーカイブズ―つまりただ彼らの業績を語る文書だけでなく、彼らの人生哲学を示す文書も収集する、そのための組織と施設がつくられたのです。マサチューセッツ歴史協会の創設者たちがつくりあげたのは、いわゆる収集アーカイブズ（収蔵施設も含む）でした。彼らの組織は政府や教会や企業など、従来アーカイブズを保有してきた組織とは全く関係がありませんでした。マサチューセッツ歴史協会の創設者たちは、今後歴史が書かれるときの基礎となるナマの記録を集めているという自覚があったのです。

19世紀に入り、入植者たちが西部へ向かい中西部に新しい州を形成するにつれて、マサチューセッツのモデルが次々に取り入れられ、歴史協会が各地に設立されて、アメリカ独立革命と西部開拓の経験を記録に残すべく、歴史的な文書を、多くの場合個人から、また地方政府からも収集しはじめました。歴史を書くためのナマの記録を集めることがアメリカにおけるアーカイブズ事業の始まりだとしたら、それはアメリカに特有のやり方で、マサチューセッツ歴史協会の設立と、同協会による個人文書の積極的収集とともに始まったと言えるでしょう。

アーカイブズ事業を、アーカイブズ文書の取り扱いにあたってアーキビストが守る原則、という点から定義するとしたら、アメリカのアーカイブズ事業の出発点としてもう1つ違う時点を考えることができます。それは、フランス革命後ヨーロッパで発展した現代アーカイブズ理論とその実践がアメリカに渡ってきたときです。フランス人、そしてそれに続くプロシア人のアーカイブズに関する経験により、現代のアーカイブズ事業の実

践における2つの最も基本的なコンセプトが打ち立てられました。第一は、「フォンドの尊重 (Respect des Fonds)」の原則です。つまり業務を行う機関（個人・組織）が業務遂行にあたり作成した文書群（＝フォンド）は、他の個人や組織が作ったものと分けて保存する、ということです。フランス政府はこの原則を1841年に制度化しました。第二は、「原秩序尊重の原則」です。これは、ある1つのフォンドに属する記録については、業務を行う機関（あるいはいわゆる「作成者」）が、業務遂行の過程で記録を組織的かつ容易に利用するために考案したファイリング編成を可能な限り維持することを意味します。この2つの原則が目指すのは、文書が作成された文脈を守ることにより、記録が作成された活動の一部をなす文書の完全性、有効性、そして真正性を守ることです。

アメリカの記録保管者たちは、フランスで定式化された原則を知っていたわけではないにもかかわらず、通常「フォンドの尊重」原則は守っていましたが、「原秩序尊重の原則」に関してはアメリカ版の原則をつくりはしなかったのです。そのかわりに彼らが好んで行ったのは、アーカイブズを一点ずつ年代順に配列し直すことでした。ヨーロッパの「フォンドの尊重」原則と「原秩序保存の原則」が強い説得力とともにアメリカに上陸したのは、ウォルドー・ギフォード・リーランド (Waldo Gifford Leland) が1909年、アメリカ歴史学会年次総会における演説でこれらの原則を紹介したときです。それに鼓舞されてアメリカのアーキビストたちは最初の専門職団体であるアーキビスト会議 (Conference of Archivists) を設立し、新しいコンセプトを織り込んだ実務的マニュアルを作成しようと準備にとりかかりました。しかし第一次世界大戦により注意がそらされたため、提案されたマニュアルが完成することはありませんでした。

さて、ある国に「国立公文書館」が設立されることが基準点となるのであれば、アメリカにおけるアーカイブズ事業の始まりはようやく1934年～1935年ごろ、建国から1世紀半もたってからということになります。方法論的実験を重ねた末、アメリカ合衆国公文書館のアーキビストたちは、確信を持って2つの基本的なヨーロッパ由来の原則を採用します。しかし「フォンドの尊重」原則は、そもそも生成される記録がまだ少ない時代に生まれたものでしたから、第一次世界大戦と大恐慌という非常に特異な歴史的時期に巨大な国家を運営することから生まれる大量の記録、というアメリカの状況に合わせて修正せざるを得ませんでした。こうした環境下でアメリカのアーキビストたちはレコード・グループの概念を確立したのです。アメリカのアーキビストたちはまず、イギリスのアーカイブズ理論家ヒラリー・ジェンキンソン卿が確立したアーカイブ・グループの概念からスタートしました。アーカイブ・グループは、政府内における最高水準の独立した行為に属する全ての記録を包含するものです。しかしアメリカ政府はあまりにも大きく複雑で、その活動から生まれる記録の量はすでに数百万立方フィートに達していましたから、ジェンキンソンのやり方でそれを管理するのは物理的にも知的にも不可能でした。レコード・グループの概念は、扱う記録の物理的量と組織の複雑性を考慮に入れたうえで、ジェンキンソンの「独立した行為」をより柔軟に適用したものでした。

原則をどうすれば適切に応用できるかを考え出すことに加え、アメリカ政府のアーキビストたちは誰もが共有する問題、つまり「国立公文書館」に保管されるべき記録とはどんな記録か、という問題に直面していました。この問題に対し、彼らはアメリカの経験に特有の2つのコンセプトを用いて答え、それがアメリカの記録が置かれた環境を越えて他の国でも使われるようになったのです。第一に、アメリカのアーキビストたち

は「アーカイブズ」を定義するにあたり、フランス、そしてその後のドイツのアーカイブズ概念を取り入れました。つまりアーカイブズは歴史的記録だということです。それから彼らは、記録が歴史的価値を持つか否かを判断する方法を考案しました。彼らが考慮したのは、例えば記録の作成からの年数、記録が作成されるに至ったもとの事象をそれだけ完全に表現しているか、その情報が含まれている大量の記録との関連において、どれだけ多くの情報が集中して記載されているか、などの点です。この歴史的価値の有無を判断するプロセスについて彼らが用いたのが、「評価 (appraisal)」という用語です。評価に関する決定はいまだ評価を行うアーキビストの判断に任せられていますが、そうした判断に達するために考慮すべき点は明確になっており、従来これほどまでに慎重に定式化された方法論はなかったといってもよいでしょう。

第二に、評価の技術を確立するという作業から、草創期のアメリカ合衆国国立公文書館のアーキビストたちは、記録に関する全く新しい作業分野を開拓したのです。レコード・マネージメントの分野です。記録が永続的価値を持つかどうかを判断するために、個々の記録を全てチェックしなければならないという状況にアーキビストが陥らないようにするため、アーキビストたちは記録を「スケジュールする」技術を確立したのです。それによれば、彼らはまず記録の内容、目的、法的根拠、そして記録作成に至ったもとの業務を完了するためには記録の使用期間がどれくらいになるかを記述します。それ以降は、アーキビストはある部局で、他の部局で既に「スケジュール」したのと似たような記録群を見つけたときには、個々の記録を全て調べなくても同様な評価判断を下すことができるというわけです。そしてアーキビストたちはすぐに、記録が作成された本来の目的を果たし終えてからだけではなく、まだその目的を果たしつつあるときにもこの「スケジュールリング」を行えることに気づきました。現在使用中の記録が増殖していく過程をコントロールする技術を考案するなかで、彼らはレコード・マネージメントという新しい分野を打ち立て、自身をレコード・マネージャーと呼ぶようになりました。要するに、レコード・マネージャーは第一の人生を過ごす記録を扱い、第二の人生を送る記録、つまり作成されるに至ったそもそもの目的を果たし終えた記録を扱うアーキビストとは別である、ということになったわけです。

その後数年間で、レコード・マネージャーたちはレコード・マネージメントで強調されるべき4つの点を明らかにし、これはいまでも有効でありつづけています。

1. 現代の業務遂行において作成され利用される膨大な記録を管理し、引き続き必要とされる記録だけが保存されることをできる限り確実にすること。
2. 必要なときには記録が担当者のデスクにあり、必要がなくなったらより管理コストの低い保管施設に移動して、その記録が本来の目的を果たし終えてアーカイブズに移管されるか廃棄されるまで、そこで保管すること。
3. 政府であれ市民であれ、証拠となるべき記録の完全性と、記録された全ての人の権利を守ること。
4. 記録作成にかかるコスト、また記録紛失の際に再度記録を作成することに要するより大きな支出に鑑み、記録を経済的資産として管理すること。

アーキビストたちがともに議論し、自らの実践をより洗練されたものにするため専門職団体を設立したときにアーカイブズ事業の専門化を見ることができますが、これもまたアメリカにおけるアーカイブズ事業の始まりとして考慮すべき時点です。アーキビスト会議（Conference of Archivists）がこの端緒ではあったのですが、1936年、つまり国立公文書館開館の翌年に設立されたアメリカ・アーキビスト協会（Society of American Archivists）こそが、定期的会合により共通の問題を議論し、さまざまな問題についての理論面・実践面からの解答を広く知らしめるための出版活動にも取り組んだという点で、専門職団体としての役割を真に果たしたものだと言えるでしょう。

アメリカ合衆国のアーキビスト教育

ある専門職がいつから専門職となったのかを決めるのが、専門的職務を果たすために必要な知識が文化・体系化され、その質が常にチェックされるようになったときだとしたら、アーカイブズ学が初めて大学レベルの課程として教えられた時こそ、アメリカにおけるアーカイブズ事業の始まりと考えることもできるでしょう。驚くに当たらないことですが、初めて大学にアーカイブズに関するコースが置かれたのは、アメリカのアーキビストたちが集まって専門職を確立しようとアメリカ・アーキビスト協会を設立した後でした。1938年、ニューヨーク市にあるコロンビア大学の図書館学大学院に設置されたのが最初のコースです。このコースの開設以前は、アーカイブズに職を得たのは歴史学の教育を受けた人たちだったので、アーカイブズにおける最も重要な仕事は「カレンダー」の刊行という歴史学的な仕事だと考えられていました。「カレンダー」とは、一連の文書を年代順に（だから「カレンダー」と呼ばれるのですが）配列し、多くの場合編纂者による解題を添えた出版物のことです。しかしコロンビア大学のコースは、アーカイブズに関わる仕事の経験をまとめ、体系化するにあたり、歴史的研究を行うというアーキビストの仕事よりも、アーカイブズ施設や文書のまとまりとしてのアーカイブズをどう管理するかという点に重点を置いたものでした。

これに対し、アメリカ・アーキビスト協会会員である歴史学教授たちは、「アメリカのアーキビストたちは、コロンビア大学のカリキュラムを拡大するよりもヨーロッパの教育方式を取り入れるべきだ」と提案します。ヨーロッパのアーキビスト教育は、1829年、パリに国立古文書学校（Ecole des Chartes）が設立されて以来、それぞれの国で独自の発展を遂げてきました。パリの国立古文書学校の学生たちは歴史学、言語、そして古文書学（diplomatsics）を学びます。古文書学は文書の構造を研究する学問で、古文書の体系的分析方法として17世紀に発展したのですが、それは文書の真正性を、文書の構造や様式が、その文書を作成したとされる機関で同時代に作成された文書の構造や様式とどれほど一致しているかを確かめることによって判断するものです。要するにこれは文書を同定する歴史家の仕事であり、文書を管理するアーキビストの仕事ではなかったのです。

「アメリカでもヨーロッパ型のアーキビスト教育を」と主張していた人たちは、3段階の学位からなるプログラムを提案していました。

1. 文書に関する基本的業務ができることを目指す学士号
2. アーカイブズ機関内での業務を監督する管理職クラスを養成する修士号

3. 主要なアーカイブズ機関の館長クラスを目指す人のための博士号

結局のところ、ヨーロッパの教育システムもカリキュラムも採用はされませんでした。アメリカの状況に合わなかったからです。アメリカのアーカイブズ事業は、歴史の補助分野として発展した（のであれば上記のような段階的学位授与システムが適しているのでしょう）わけではありません。アメリカのアーキビストが、所蔵する最も古い文書を取り扱うにあたり直面する問題は、古文学書の知識を絶対に必要とするようなものではありません。さらに国立公文書館を除けば、こうした3段階の学位授与システムを正当化するほど多くのスタッフを抱え、規模の大きい複雑な運営形態を取っているアーカイブズ機関はほとんどなかったのです。

1940年代、そしてそれ以降も、大学での教育課程よりも切実に求められていたのは、現職者やこれからアーキビストになろうとする人に対する短期の基礎的な研修でした。そうした要望に応えるべく、1945年、国立公文書館により「現代アーカイブズ講座（The Modern Archives Institute）」が設けられました。4週間の集中プログラムとして始まったこの「現代アーカイブズ講座」は今でも2週間のプログラムで、アーカイブズ事業を学ぼうという人たちに入門コースを提供しつづけています。ただし教室での研修のみで、実習はありません。この講座が現在も毎回順番待ちが必要なほどの人気を保つなか、2つの地域団体—ジョージア州とカリフォルニア州のアーキビスト協会—が、同講座とほぼ同様の講座を開設しています。

アーカイブズ専門職が成熟するにつれ、アーキビストたちは何の根拠もなくアーキビストを自称する人たちと、専門家たるアーキビストとを区別できる何らかの手段を確立する必要をより強く感じるようになってきました。そうした区別はもちろん、アーカイブズにおける実践に関する標準的に知識を有するか否かにかかっています。そこで1989年、アメリカのアーキビストたちは米国公認アーキビスト・アカデミー（Academy of Certified Archivists）を立ち上げ、7つの分野についての基本的知識を問う試験の実施を監督することになりました。その分野とは、選別、評価と収集、編成と記述、レファレンス・サービスとアクセス、保存と保護、アウトリーチ、アドボカシー、プロモーションⁱⁱⁱ、アーカイブズ・プログラムの運営、そして専門的・倫理的・法的責任です。

この試験に合格し、アーカイブズで1年間フルタイムの仕事をした人は、単なる「アーキビスト」ではなく「公認アーキビスト」としての資格を与えられます。アカデミーはメンバー拡大を続け、現在のメンバーはほぼ900名を数えるに至っています。認定資格を維持するため、認定アーキビストは5年ごとに試験を受け直し、変化の早いアーカイブズ界に関する知識を常に更新していることを示さなければなりません。

ⁱⁱⁱ 訳注： 그레이シー教授はこの3語を、次のような意味で用いられているとのこと。「アウトリーチ」＝アーカイブズをよく知らない人たちに、アーカイブズにはどんなものがあり、なぜアーカイブズが大事なのかを「アーカイブズの外に出て」知らせる活動。（アメリカでは、「親組織にアーカイブズの重要性を理解してもらう」意味では「インリーチ」という語が使われている、とも）「アドボカシー」＝アーカイブズとその重要性に関して主張していくこと。特に政治的な環境で、関連法制度の整備等に影響を与えようとする活動をさし、ロビイングも含む。

「プロモーション」＝政治的な色彩のない「アドボカシー」。 그레이シー教授ご自身は、こうした概念間に明確な境界線はなくそれぞれにオーバーラップする部分もあるので、全てをひっくるめて「アーカイブズのマーケティング」という用語を使っているとのことだった（本稿10ページにも言及あり）。（ 그레이シー教授からのメール、2008/11/26、2008/11/28）

私が 1959 年にこの世界に入ったときには、アーカイブズ業務に携わる道といえば、アーカイブズ機関で研修を受けるか、そこで仕事をしながら経験を積むことでしたし、この状況は 1960 年代を通じて変わりませんでした。それが 1980 年代になって、私が勤務する大学を含め、質の高い図書館情報学部を有する主要大学、また歴史学部が強い大学のいくつかが、アーキビストを常勤の教員として採用し始めたのです。それは学生がアーカイブズ事業を専門として学ぶことができるだけの幅と奥行きを持ったカリキュラムを作りあげるためでした。その結果として 1980 年代以降、アーキビストになろうとする人たちのほとんどは、いま皆さんがここで立ち上げつつあるような大学院レベルのアーキビスト養成課程を修了することでこの分野に飛び込んでいったのです。

私自身はテキサス州公文書館で働きながら母校で 6 年間アーカイブズ関連科目を一つ担当したあと、1986 年にアーキビスト教育者常勤雇用の第一波に乗ることになったわけです。気前のよいある寄贈者が教授ポストを創る、つまり学内に基金を設けてそこからの収入で上級教員を雇用できるようにするために 10 万ドルを寄付して下さったのですが、そのときに私は常勤の教員として大学に採用されました。さて、基金の受益者の肩書きには基金の名前がつくことになっています。そういうわけで私は「ビル・ダニエル知事基金アーカイブズ学教授」なのです。

1990 年代になると、こうした大学のうち、またも私の所属する大学を含めていくつかの大学が、2 人目、3 人目の教員を雇用して格段に教育内容の幅を広げました。テキサス大学のアーカイブズ事業で 2 人目の常勤教員は、電子およびデジタル記録の専門家です。その他の教員は一常勤の人、非常勤で特定の科目だけを教える人がいますが一記録管理、フィルム・アーカイブズ、図書、紙、音声記録媒体の保存などの科目を教えています。

こうして 2000 年以前にはすでに、アーカイブズ事業の修士課程はこの専門職につくための主要かつ画一化された手段となっていたのです。

アメリカ・アーキビスト協会はこの変化を引き起こすために重要な役割を果たしました。教育に関する委員会はアーカイブズ事業のカリキュラム作成に直接関連するトピックを包括的に把握し、それを構造化しました (http://www.archivists.org/prof-education/ed_guidelines.asp を参照のこと)。それによると、トピックは 2 つの主要なカテゴリー、「コア知識」と「学際的知識」に分類されています。

「**コア知識**」は次の 3 つの構成要素からなります。

「**アーカイブズ機能の知識**」（つまり、アーカイブズ業務の特定領域に関連した理論と方法論）。個々のトピックとしては、アーカイブズ機能の基本的部分をなす選別と収集、編成と記述、保存、そしてレファレンスとアクセスがここに含まれます。それにアーカイブズ機関の運営も加わります。そしてとりわけアウトリーチとアドボカシー、または（私はその意味で使っているのですが）「アーカイブズのマーケティング」に重点が置かれています。学生があらゆる種類の聞き手に、聞き手に訴える言葉で、聞き手にとってなぜアーカイブズとアーカイブズ事業が重要なのかを、説得力をもってしかも効果的に語るようにしなければならぬからです。

「**専門職の知識**」（専門職の歴史と、アメリカおよび海外でのアーカイブズ実務の発展の歴史）。ここでは、アーキビストとアーカイブズ専門職の価値と倫理、という社会的に重要なトピックが含まれます。

コア知識の第3の構成要素は、「**文脈的知識**」（つまり、記録が作成・管理・保存された文脈）です。この幅広いトピックにおける2つの重要なポイントは、記録が作成され、利用され、保存された文脈の一方にある社会的・文化的文脈、そして他方の法・財政システムです。また大学院プログラムの修了者は、記録・情報管理および特殊分野である電子・デジタル媒体に関する実用的な知識なしには「十分な教育を受けた」とは言えないでしょうし、こうした知識が文脈的知識を構成する分野のいわば総仕上げとなるものなのです。

コア知識と補完しあう形で、「**学際的知識**」があります。学際的知識は、アーキビストが糧とすべきさまざまな分野の知識がいかに重要かを学生に意識させるためのものです。これには保存の中でも修復に関する部分（媒体の取り扱い）、組織の運営と行動様式に関する理論、歴史学の理論と実際、そして情報技術の本質などが含まれます。

こうした大学院教育のガイドラインを厳密に反映してコース設計を行った大学院レベルのアーキビスト教育課程はありませんが、アーカイブズ事業のカリキュラムが十分に包括的で漏れのないものであるよう、誰もがこのガイドラインを取り入れてカリキュラムを組んでいます。

教育に加えてもう一つ、アーカイブズ事業に関する包括的な教育プログラムが存在することの大きな利点があります。それは私たちの専門分野の実践に影響を与えるようなさまざまな事象を研究することです。学生や教員の研究を通して、アメリカのアーキビストたちは社会全体においてアーカイブズ事業がどう受けとめられているかについて多くを学び、また必要な研究をする時間がない現場のアーキビストたちでは効果的に対処できないような性質の問題について、解決策ではないにしてもある種の洞察を得てきたのです。

一言で言えば、2008年時点のアメリカにおけるアーカイブズ事業のための専門職教育の柱は、私が所属する大学のように、いまお話した「大学院アーキビスト教育ガイドライン」を織り込んでコース設計された、相応の幅と奥行きを持つ教育課程を有する12校前後の大学から成っています。こうした大学のプログラムは、学生が修士号または博士号を取得するに十分なだけのアーカイブズ関連専門科目・関連科目をカリキュラムに取り入れています。修士課程はアーカイブズ機関に就職するに十分な実力をつけさせるものです。博士号は研究学位ですので、アーカイブズ事業に関する教育に携わる人を養成するため、あるいはアーカイブズ機関での仕事、とくに大学内のリポジトリでの仕事をするに十分な力をつけさせるためのものです。

2008年のいま、アメリカのアーキビスト養成機関はアーカイブズ機関からの需要に応えるに十分な数の卒業生を生み出しています。しかし全てがバラ色というわけではありません。水平線に見える暗雲、それはアーカイブズ事業の教育に携わるべく博士号を取得しようという学生が少なすぎることです。博士号取得を目指す学生のほとんどは、アーカイブズ機関で仕事をしたいと考えています。一方私の所属する大学や同レベルの大学では、博士号がなければ常勤の教員として雇用することはありません。そのため、第一世代のアーカイブズ教育者が引退する時期を迎え、アーカイブズ専門職は私たちの世代に取って代わる人材を欠く

ことになってしまいました。アーカイブズに就職する道が大学院教育しかなくなってしまういま、次世代のアーキビストを育てるための教育者が不足するという事態に陥った場合、それがアメリカのアーカイブズ事業に与える影響は深刻なものとなるでしょう。

アーカイブズが社会に果たす役割に関する重要な論点

皆さんが、そして私が関わっているようなアーキビスト養成課程がしなければならないことは、卒業生が単に基本的なアーカイブズ業務をこなせるというだけでなく、より大切な仕事を、つまりアーカイブズ機関が社会との関わりで持つ問題や課題に対処するという仕事を果たせるようにすることです。多くの人が今の世代にとって主要な課題だと考えているのは、電子文書を確実に保存するシステムをつくり、その完全性と利用可能性を維持することに関わる全ての側面を完全に理解することです。しかしアーカイブズとして残すべき電子フォーマットの全ての文書に関しそれを確実に収集し保存するための戦略と技術を打ち立てることと同じくらい重要なことがあります。電子記録が現実になるずっと以前から、アーキビストそして社会全体に大きな問いを投げかけてきた3つの政策課題があり、私の考えではそれこそが重要です。なぜならアーカイブズが、そして民主主義社会が存続しつづける限り、私たちはその課題を抱えつづけることになるかと予想されるからです。

1. 何が「記録」か、を定義する権力を誰に与えるか？

組織内アーキビストにとって、つまり所属する組織の記録を管理する目的で設置されたアーカイブズに勤務するアーキビストたちにとっては、どんな文書あるいは文書群がアーカイブズとして価値を持つかを自ら判断できるのが基本になります。しかしこの判断がより高次の権限を持つ者に任されている場合があまりにも多すぎるのです。

何がアーカイブズで保存すべき記録であり、何がそうでないかを定義するにあたっては、いくつかの要素が決定的な役割を果たします。そうした要素に含まれるのは、アイテムの形態と媒体（例えば地図、議事録、書簡など）、記録が作成されるに至ったもとの行為（組織の業務遂行のため）、行為者（作成者）、作成の目的（組織や個人の業務遂行のため）、そして最終的な権限の所在（どんな個人や集団の手に、最終的な決定権があるか）などです。

経験上、より高い権限を持つ人物や組織が、アーキビストの職業倫理の中心要素をなす中立性をもって仕事に当たることはないことは確かです。私たち自身がこの問題に対してもっと有効な取り組みをしなければ、私たちの世代が後に残す記録は、私たちに手渡されたものと比べて、量は増えても誠実さの点では劣ることになってしまうでしょう。

2. アーカイブズとして保存すべき記録とは？

アーカイブズとして保存すべきかどうかを評価・選別する過程で、アーキビストはその最大の役割を社会に対して果たしていると多くの人が主張しており、それは十分に根拠のあることです。選別は、文明の証

拠となる記録の総体のうちどの部分がアーカイブズによって保存されるために適切なものかを判断する営みです。アーキビストが選別しなかったものは、二度と見るができなくなります。記録全体のなかでどの部分が将来役に立つかを予言してくれる水晶玉などはないことを理解しているからこそ、最善の状況下でさえ、アーキビストはこうした記録の「生死」に関わる決断にはできるだけ踏み込まないようにしようとしがちです。しかし 20 世紀に作成された記録、そして今も作成されつづけている記録の量に比して、記録保管スペースも記録を管理する（そして記録の完全性を保つ）スタッフも不足していることから、選別の必要を避けることはできなくなりました。だからこそ、アーキビスト個人の好みが専門職としての判断を曇らせる可能性を最小とするために、アーキビストたちは選別過程を体系化し、できる限り定式化された形で行えるようにしてきたのです。政府・企業・個人が業務遂行に当たって作成する記録の量が年間数十万、そして数百万立方フィートに達して以来 1 世紀の間、アーカイブズ理論家たちは記録の「籾殻」からアーカイブズの「小麦」をより分ける方法論を提案しつづけてきました。そうした理論は「複製だけは抜く」から「個別資料はチェックせず記録全体を丸ごとで選別」まで幅こそ広がったのですが、どれも記録を作成した業務主体が果たす役割だけに判断基準をおいたものでした。

あえて言うておきますが、あらゆる場面に妥当な完璧な解決法など存在しません。とはいえ、より洗練された方法を見つけようという試みは続きますし、そうでなければならぬのです。全ての記録を保管できる空間も資源もなく、また作成目的を果たした記録のうち再び利用されるのはほんの一部でしかない経験が明白に語っていることから、私たちは選択をしなければならず、方法論はその際にとるべき道を照らすものだからです。選別に関する考察を前に進めることは社会にとって決定的な影響を及ぼすものであり、アーカイブズに携わる最良の頭脳の結集を必要としています。

3. アーカイブズの業務上の使命と、文化的使命をどう均衡させるか？

西欧世界においては、業務のためのアーカイブズ（作成された目的を果たしつつある記録）とは異なる概念としてフランス革命が歴史的アーカイブズ概念を生み出してから、そしてアメリカでは歴史学者たちが 19 世紀後半に政府の記録管理の不便を指摘しはじめてから、そもそもアーカイブズを「持つ」ことの目的そのものに関し、ある種の緊張状態が続いています。アーカイブズを保存する理由は、どんな形であれ、またあらゆる形で歴史を研究し歴史を書くことにあり、これには家族史・家系研究（他のいかなる目的よりも多くの利用者をアメリカ政府のアーカイブズに送り込んでいる分野です）も含む、と考える人たちは、アーカイブズ保存の文化的基盤を守ろうとする人たちです。私が 1959 年にテキサス州公文書館に職を得たときに「州公文書館の価値とは」という議論の基礎となっていたのもこの考え方でした。

それとは対照的に 2008 年のいま、アーカイブズを保存する主たる理由としてアーキビストが主張するのは業務上の視点です。つまりアーカイブズは政府・企業・個人の行為や出来事の証拠だということです。この考え方をとる人たちは、「ただ何か古いものを見るためだけにアーカイブズに来る人はいない」と主張します。アーカイブズに来るのは、その時点でその人の生活に重要な情報を得るため—その人の人生にとって重要なことを処理するための必要を満たす情報を得るためだと言うのです。そしてその情報に含まれてい

る、ある出来事が生じた日付などは、単にその情報の一要素に過ぎないと。こうした見解の対立が、アーカイブズが社会に対するサービスを提供することにどれほど深い影響を及ぼし得るかは、私が現職時代に経験した4つの事例からも十分に明らかになると思います。アメリカの4州、コロラド、フロリダ、メイン、そしてウェスト・ヴァージニアで、州知事がそれぞれに大まじめで州公文書館を廃止しようとしたことがあったのです。その理由は、公文書館が州政府の行政サービス機関というよりは文化的施設であるから、というものでした。州財政が逼迫するなかでは、価値は認めるが必須とは言えない文化面への支出をするわけにいかない、というのが知事たちの言い分でした。

結びに

どんな視点から社会を見るにしても、そして記録とアーカイブズが社会の存続と進歩に果たす役割をどうとらえるにしても、「私たち人間とは何者か」を考えるにあたって記録とアーカイブズがどれほど不可欠なものか、また今という時代がアーキビストになるにはどれほど面白い時代であるかは明らかです。日本、アメリカ、そしてより広く世界のアーカイブズ事業の歴史をご覧ください。記録の作成、保存そして利用に関する技術の進歩、なかでも全く新しい種類の記録－電子的記録－の出現をご覧ください。この進歩により私たちはこれまでなかったほど容易に情報をとらえ、利用できるようになりました。そしてさまざまな活動、権利、特権、そして個人の法的存在の証拠を残すことに関して社会が直面している多様な問題をご覧ください。

これら全ての点において、私たちが生きている時代は歴史上の他のどんな時代よりも、アーキビストの知見と専門性を必要としている時代であることが疑問の余地なく見て取れるでしょう。必要とされているのは、紙媒体であれデジタルであれ、「どんどん量が増えていく記録をどんどん手狭になっていく収蔵施設にどう収めるか」という問題を解決することだけではないし、「記録をもっと確実に管理するにはどうしたらいいか」ということだけでもありません。必要とされているのは、私たちの時代が抱える主要な問題を、アーキビストの視点を用いて解決することです。なぜならどの問題も一繰り返しますが、「どの問題も」です－その根っこや、説明や、解決のカギがアーカイブズのどこかにあるはずだからです。アーカイブズは世代を超えて蓄積される経験の、有形の遺産です。人間の経験の積み重ねの上に新たな経験を築き、経験から学ぶことこそが文明の礎となるものです。ですから、記録された情報のダイナミックで革新的な管理を可能にし、それを最大限に利用することは、私たちみんなの利益になるよう社会を良くしていくために不可欠のことなのです。

どこであれ、これからアーキビストになろうという人たちが私はいらやましい。彼らは－皆さんのことですよ！－アーカイブズに関するサービスを社会にもたらすという仕事を果たすために、早起きをせずにはいられないでしょう。彼らがこれから目にする変化、彼らがこれから果たす貢献、そして彼らがこれから築いていくキャリアを想像するだけでわくわくしてしまいます。今という時、そしてこれからの時代は、アーキビストになるには明らかに、今までになく最高に面白い時代なのです。社会は、代替がきかず、しかもどんどん脆弱化していくアーカイブズ資源を管理するため、最高水準の頭脳を必要としています。だからこそ、今年皆さんが開設したアーキビスト養成課程は、学習院大学がなすことのできる最も重要な貢献の一つなのです。

この課程の開設はアーカイブズ事業によりよい実践をもたらすだけではありません。もっと重要なことですが、それは日本における生活と労働の質を高め、そして卒業生が向かう地がどこであれ、その地の人々が置かれた環境をより良いものにしていく、そういうことへの貢献となるものなのです。

(日本語で) どうもありがとうございました!

訳：平野泉・筒井弥生（学習院大学大学院人文科学研究科 アーカイブズ学専攻 博士前期課程）